



「トゥルテ」Ex-Sartory Paris 1795

5大トゥルテの一つで、世界1エレガントな弓といわれている。サルトリが影響を受けた弓でもあり、彼自身がコレクションしていたことから、(Ex-Sartory)と呼ばれている

ドの豊富な土地で、それらを運ぶために創られたガリオン船が、強風や荒波で難破するのを避けるために、船の重量を調整する必要がある。その「重し」として使われていたのが、非常に密度の高い木材、フェルナンブーコでした。後にこの木材が染料としても使われることがわかり、ポルトガルからフランスへ渡ります。トゥルテはそこでこのフェルナンブーコを見出したのです。

その後、トゥルテは34歳の頃に、ヴァイオリニストで作曲家のジョヴァンニ・バティスタ・ヴィオッティや同じくヴァイオリニストで作曲家のロドルフ・クレゼールと出会います。意気投合した彼らは、共に協力して新たな弓の様式を探っていきます。

この時代はさまざまな曲のスタイルや演奏方法が共存していたため、演奏家の彼らも、あらゆる音楽のスタイルに合う弓の必要性を感じていたのです。そこでトゥルテはまず、弓の端から端まで安定して演奏できるように、フロッグとヘッドを同じ高さにしました。そして、ヴィオッティの高度な曲を演奏するために適した弓の反りを確立します。次に、ヴィオッティやクレゼールの最も不満とする弓毛の不安定さを改良するために、フェールと呼ばれる金属製のリングを発明します。これ

により、弓毛を薄く均一に張れるようになったのです。

そして、重量バランスを整えるために、フロッグに金属製のプレートをはめ込むなどして、オープンフロッグからカバードフロッグへと改良し、さらにはラッピングと呼ばれる巻きをスティックに施すことで、弾きやすい弓の重量バランスを確立したのです。

なお、ほとんどのトゥルテが製作した弓のフロッグの四角板には、3つのピンが埋め込まれていますが、これはフランス革命の時代に、トゥルテが密かに支援していた秘密組織フリーメイソンの象徴「自由・平等・博愛」を表現したものです。

これにとどまらずトゥルテの研究は続き、彼が50歳の頃にはヴァイオリン弓のスティックの長さを73cm、ヴィオラ弓は72・5cm、チェロ弓は70cmとし、総重量もヴァイオリン弓が60g、ヴィオラ弓は70g、チェロ弓は80gがベストであると決定づけられます。

以降、現在に至るまで、すべての弓製作の基本形式は、これらの「トゥルテ」が確立した様式や寸法が基準となつていきます。

そして70歳になっても技術の衰えを見せることなかったトゥルテは、87歳でその生涯を終えるまで弓製作とその研究を続けたのです。

# フレンチ・ボウの名工

## 弓の歴史と名工たちの系譜

演奏家にとって「ある意味では楽器よりも大切」といわれる「弓」。中でもフレンチ・ボウは18世紀から現在に至るまで最高級の弓であり続けている。2020年4月号では全体像を取材し紹介したが、今号からは1ブランドずつ、その人と弓を紹介していく。まずは現代弓の始まりともいえる「トゥルテ」を紹介する。

文/清水宏

### 第1回

# フランソワ・グザヴィエ・トゥルテ

## Francois Xavier Tourte

フランソワ・グザヴィエ・トゥルテ(1748〜1843)は、数百年以上続いていたバロック様式の弓を改良して、古典派以降の現代様式を発明・確立した、楽弓製作の歴史上、最も重要な人物です。彼の製作した作品は、「弓のストラディヴァリウス」と呼ばれ、現代の弓製作者はもとより、多くの演奏家、収集家、楽器商にまで広く絶賛されています。

1748年にフランスのパリで、弦楽器及び楽弓の製作者である父ピエールのもとに生まれたトゥルテには、二つ年上の兄レオナルドがいました。そのレオナルドは10歳の頃から、父の弓製作の仕事を引き継ぎますが、一家の生活が苦しかったため、トゥルテは12歳の時に、父から当時社会的に高い評価を得られた時計製作の道を指示されます。しかし、弓製作への情熱を捨てきれなかったトゥルテは、時計作りの傍らで弓のスクリーやメネジの研究、象牙や鼈甲(べっこう)等の新しい素材の研究を続けます。そして、16歳の時に父が他界すると、安定収入のあった時計作りの仕事を捨て、兄と共に本格的に弓製作の仕事をはじめたのです。

### ■時代と共に変化した弓の「フロッグ」

#### ■さまざまな技術改良をし近代弓の基礎を築いたトゥルテ

まずトゥルテは、弓を製作する木材についての研究を始めます。この頃までの弓製作では、スネークウッド、アイアンウッド、アモレット、といった木材が主ですが、彼はそれまでの常識にとらわれることなく、さまざまな木材を海外から取り寄せて実験します。砂糖を輸入するために使っていた樽で弓を製作したこともありましたが(これは後に杖の材として普及した)。そして研究の結果、フェルナンブーコと呼ばれる



バロック様式の「オープンフロッグ」



現代様式への変わり目となる「カバードフロッグ」。フェールが施され、黒檀のスライドでフロッグにカバーが施されている(ヴィオッティ・スタイル)の初期のもの



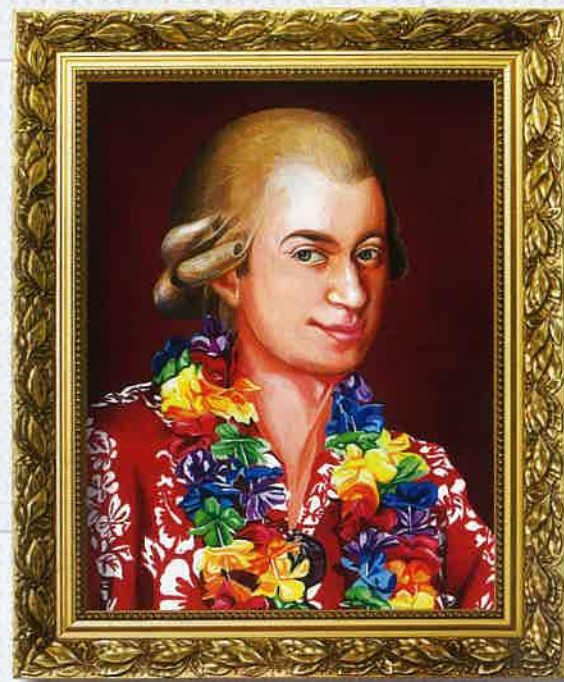
現代様式のカバードフロッグ Ex-Sartory (ヴィオッティ・スタイル)の後期完成形。貝目や貝スライドで美しく装飾され、金属製の四角板やヒールプレートで重量調整が施されている



木材が最も弓に適していることを発見したのです。フェルナンブーコとは、ブラジルのフェルナンブーコ州で採れるブラジルボクの豆科の木材です。かつては、ブラジルはヨーロッパ、ポルトガルの植民地でした。そこは金やダイヤモンド



Bach



Mozart



Beethoven



Mahler

みんな大好き夏音。

サマーミュージーザ

MUZA KAWASAKI SYMPHONY HALL

# フェスタサマーミュージーザ KAWASAKI 2020

お問い合わせ・お申込み ミューザ川崎シンフォニーホール 7/23(木祝)~8/10(月祝)

【5月7日(木)以降はこちらにお電話ください】 044-520-0200 (10時~18時) 特設サイト <https://www.kawasaki-sym-hall.jp/festa/>

主催: 川崎市、ミューザ川崎シンフォニーホール(川崎市文化財団グループ) 後援: 川崎市教育委員会、公益社団法人日本オーケストラ連盟、J-WAVE 81.3FM、OTTAVA 助成: 文化庁文化庁文化芸術振興費補助金(劇場・音楽堂等機能強化推進事業) | 独立行政法人日本芸術文化振興会

【お知らせ】 緊急事態宣言に伴い、ミューザ川崎シンフォニーホールは5月6日(水・振替)まで臨時休館しております。 ※休館中のお問合せ 代表電話 044-520-0100 (10時~17時)



## ■トゥルテの弓の変遷



初期のラウンド型のエレガントで美しいスタイルは、徐々に力強くなっていき、後期のスクエア型へと変化した。後の弓製作家の殆どが、これらいずれかのスタイルを参考に弓製作をしていると言ってもいいだろう

エレガントな逸品  
ラウンド型ヘッドの  
〈ヴィオッティ・スタイル〉

今回ご紹介するトゥルテの作品  
《EX-サルトリ》は、20世紀を代  
表する弓製作家のユージン・サルト  
リーが自身の研究のために所有してい

た弓で、言葉に表すことのできないほ  
どエレガントな美しさを持つ上質なラ  
ウンド型のヘッドで製作されていて、正  
にヴィオッティと共に研究・開発した  
頃の作品です。そのため、このスタイル  
の弓は後に「ヴィオッティ・スタイル」と  
言われるようになります。日本ではこ  
れまで、このスタイルの作品を、スワン

型と呼んでおりましたが、正確にはス  
ワン型の弓は、白鳥の首の様に完全な  
丸みを帯びていて、シャンファー(面取  
り)がありません。国際的に活躍し  
ている専門家たちの呼び方と統一して、  
以降このスタイルの弓を、筆者は〈ヴィ  
オッティ・モデル(ヴィオッティ型)〉とし  
て解説していきます。

サルトリをはじめ、その師匠であ  
るアルフレッド・ラミーや、さらにその  
師匠のフランソワ・ボワラン等は、この  
トゥルテの初期の作品(ヴィオッティ・ス  
タイル)を参考に弓を製作しました。  
また、フランソワ・リュボをはじめ、ジャ  
ン・ピエール・ベルソワやドミニク・ペカッ  
ト等、主にヴィヨーム工場の弓職人た  
ちはトゥルテの中期の作品や、後期の  
力強い作品であるスクエア型を参考に  
弓製作を行っていることから、トゥル  
テが後のほとんどの弓製作者たちに、  
多大な影響を与えた偉大な弓製作  
家であることがわかります。  
まさに、今もって誰も超えることの  
できない、楽弓史上の頂点に君臨して  
いるのが、フランソワ・グザヴィエ・トゥ  
ルテなのです。

### Hiroshi Shimizu

ラルジュ ファイン ヴァイオリン代表  
(資料・弓写真提供)



2003年に株式会社ラル  
ジュを立ち上げ、以降、ロ  
ンドンとニューヨークをはじ  
めとする世界各国のディー  
ラー、オークション会社と太  
いパイプを持つ。また、修  
理・調整についても国内外  
の演奏家たちに支持されて  
いる。